

Title	当事者の語りと当事者性の形成 : 断酒会会員の自己変容過程の分析
Author(s)	心光, 世津子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49458
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	心 光 世 津 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 2 2 6 3 6 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	当事者の語りと当事者性の形成—断酒会会員の自己変容過程の分析—
論文審査委員	(主査) 教授 川端 亮 (副査) 教授 木前 利秋 准教授 山中 浩司 准教授 スコット・ノース

論文内容の要旨

近年、自分の抱える問題や過去の体験がなるべく人目に触れないようにして生きてきた人々が、「当事者」として積極的にその問題について語り、ホームページや書物などを通じて大きく発信するようになった。個人の情報発信だけでなく、それ以前から存在するセルフヘルプ・グループのような当事者による活動も、高い評価をされてきている。保健医療、福祉領域の専門家が「当事者性」を高めるあるいは育むことの重要性を説くようになり、「当事者学」という言葉も生まれている。

一方で、このように「当事者」の経験が注目されるようになったことで、新たな問題も浮上してきている。たとえば、当事者の主張が無批判に正当化されたり、真実味を帯びたりすることがある。また、当事者は、問題を抱える本人だけを指すことがほとんどだ。当該問題にかかわる支援者もある意味においては当事者といえるが、専門的知識や技術、経験をいくら持っていようとも、その当事者のことや病い・障害を当事者ほどには理解することのできない非当事者、とされ、当事者との間に葛藤が生じることも珍しくない。それほどまでに当事者本人の体験は絶対的である。この聖性とも言うべきものは、どのようにして成り立っているのだろうか。このような聖性を含み持つ当事者性は、当該問題をとりまく人々や状況に、どのような影響を、どのように与えるのだろうか。

本研究では、アルコール依存症の当事者として、断酒会というセルフヘルプ・グループに所属し、アルコール依存症からの回復を目指す人々の事例を通して、この問いへの接近を試みる。どのように会員や彼らを取りまく人々のあいだで「当事者」が現実としてたちあられ、意味を持つようになるのか、という点から検討していきたい。本論文での問いを端的に表すとすれば、次のように要約される。①いかにして「当事者」の語り生まれ、その語られるリアリティがいかにして聖性を帯び、揺らぎないものになっていくのか。②なぜ断酒会会員はそれまで隠してきた負の表象を前面に押し出して活動するにいたるのか。③いかにして人は断酒会会員という「当事者」となり、その会員らしさとはどのようなものであり、どのように生まれ、維持されているのか。

この論文の分析部分は、断酒会会員の「酒歴」と呼ばれるライフ・ストーリーのインタビュー・データをもとにしている。実際には、18名の断酒会会員への個別インタビューに

加えて、1999年から断続的に行っている断酒会でのフィールドワークがこの分析と解釈を大きく支えている。むしろ、データとして提示できるのがこのインタビュー対象者の語りであり、全体としてのフィールドワークで得たことを「酒歴」の分析によって描き出していると表現する方が、実際の分析に近い。

本論文の構成とおおまかな内容であるが、まず、序章では、上記のような本論文における研究課題と、それへのアプローチの方針を示していく。そして、1章「さまざまな『当事者』」では、これまで「当事者」がさまざまな領域の研究のなかでどのように用いられ、捉えられてきたかについて概観し、あらためて整理する。

続く2章から5章では、断酒会会員のライフストーリー・インタビューをもとにした分析を行う。

2章では、「普通の酒飲み」であるためにとられたさまざまな攻防を描いていく。われわれの暮らす日本社会には、何らかの飲酒規範が存在するが、それがどのようなものなのか生活の中で人々に知覚されることはあまりない。しかし、ひとたび自身の酒の飲み方に他との違いをうすうすと知覚し始めると、他者には分からないように「普通の酒飲み」であるために様々な戦略がとられることとなる。しかし、それ自体、精神医学的には“否認”の文脈で捉えられ、そのように行為すればするほど“否認”がより強い、より“アルコール依存症的”であることの証左となってゆくこととなる。

3章では、「普通の酒飲み」であるための戦略が破綻し、自他共にアルコール依存症であると同定しはじめる過程を描いていく。印象操作の戦略が破綻すると、さらに、酒を飲み続けるための実質的な戦略がとられるようになる。そして、その戦略もまた破綻し、万策尽き、アルコール依存症という定義を受け入れ、さらにアルコール依存症として治療や断酒へと行動を起こしていくことになる。つまり、アルコール依存症という定義を受け入れるということは、それまでの行為やその後とられるべき行為についての解釈枠組みをうけていくことでもある。

続く4章と5章では、断酒会会員になる語りを、“会員らしさの形成”と“意味の転換”という二側面から捉えていく。酒を飲み続けていくためのそれまでのアイデンティティ管理がことごとく破綻した人々は、断酒会に入ることによってその転換点を迎える。しかし、彼らの多くは、その転換の過程で、入会当初はまだ真の帰属をしていなかったという。ならば、その会員らしさとは何か、どのようにして彼らはその帰属をするに至り、現在の酒歴を語るに至ったのか。この2つの章では、断酒会会員になることでどのような自己変容と解釈枠組みの転換が起こるのか、また、その転換のメカニズムをさぐっていく。

最後にあたる6章では、まとめとしてAA (Alcoholics Anonymous: 断酒会が手本としたアメリカ発祥のセルフヘルプ・グループ) とのつきあわせを行いつつ、本論文の出発点にあった問いとの接合を試みる。

AAメンバーの酒を飲み続けていたころの語りには、酒への自己コントロール self-control が多く登場していた。自己制御への囚われ、「アル中のプライド」の自覚が、酒に無力な自己より大きな力 (ハイヤー・パワー) への信仰を支えていた。

一方で、断酒会の語りでは、酒に対する無力は共通しているが、彼らが囚われていたのは顔や体面 face であった。断酒会に入ったあとも、過去の「顔」を守ることに囚われは残り、帰属を見せかけることに力が注がれるが、それが断酒会に深くコミットしていくうちに、断酒会会員としての新たな「顔」を守るために行動するようになっていく。そうして、断酒会への所属や、会員としての意識を持つことが断酒につながる、との信念を強め、自己を組織の一部として位置づけていた。逆に、そのように断酒会での連帯や会員意識が自己を作り直していくから、「顔」という観点から過去の自己についての語りが形成されたのだ、ともいえる。

このような語り形成により、酒を飲んでいる者は潜在的逸脱飲酒者、潜在的会員として位置づけられ、潜在的な会員候補は増大していく。さらに、断酒会への帰属が“真の回復”に必須という意識が形成される。そのため、アルコール依存症は疾病とみなしても、医療のみに頼った断酒には正統性をみないのだ。これらの断酒会活動により内面化された価値観、形成されたりアリティは、専門家の意見に匹敵するほどの確からしさを獲得していくのだ。

論文審査の結果の要旨

本論文は、断酒会におけるフィールドワークとその会員に対するインタビュー調査に基づいて、彼らがいかに「当事者」になっていくのか、その過程を明らかにするものである。

まず、当事者研究を概観、整理し、本論の課題を「当事者」となっていく過程、その意識の変容などの検討から、「当事者」のことは当事者が一番よくわかる、当事者でなければ当事者のことは真に理解できないといわれる、「当事者」の語りが聖性を帯びる過程を明らかにするものとする。

そしてアルコール依存症患者が断酒会のメンバーになっていく過程が記述されていく。彼らは、周りからアル中と見られないように、「普通の酒飲み」と見られるように、社会で認められている適切な飲酒規範に従う振りをいろいろと努力して行うが、結局は自他共にアルコール依存症と見なされるようになり、万策つきて、治療や断酒へと行動を起こしていく。

治療の一つとして断酒会に入ってもすぐには真のメンバーになったとはいえない。かつての自己を捨て、新たな役割、体面、規範意識を、先輩会員との関わりや会合へのコミットメントを経て、本当の会員となっていく。これらは、他人に対して、アルコール依存症になった自己のアイデンティティをある段階までは保ち、やがてそれを無意味なものとして捨て去り、新たな自己像を得る過程であった。こうして、断酒会という組織への帰属という点から、自己が作り直されていく。ここにおいて、アルコール依存症というスティグマを負った自己から、現在の自己を肯定し、自尊心を持つことで、自身のアルコール依存症を隠す必要がなくなり、断酒会員として、むしろ、アルコール依存症である自己を前面に出し、もっとも悲惨な経験を語る自己が形成されていく。

このようなセルフヘルプ・グループにおける自己変容は、近年では物語論から説明されることも多い。この物語論の側面と、他者と自己の関係論のなかで、当事者は形成されると論じられる。過去の経験を枠づけるフレームは、現在の時点から俯瞰する、過去のフレームも包括する別次元のフレームで語り直される。その際に、断酒会での活動が、語りの「鋳型」となり、かつ語りに正当化をもたらす典拠となっていく、会員の語りは整形され、自己のアイデンティティも再編成されていくのである。

本論文のアルコール依存症患者となっていく過程の記述は、印象深いエピソードを交えた非常にヴィヴィッドな描写であり、ライフストーリーという方法を的確に生かしている。また、従来のセルフヘルプ・グループ研究では、なかなか取り上げにくかった当事者のもつ「聖性」を、医療者でもあり、社会学者でもある立場から問い、物語論と自他の関係論から論じている点が優れていると評価できる。

以上の点で本論文は、博士 (人間科学) の学位授与にふさわしいものと判定する。